

日本の美意識を変えた「茶の湯」

園芸・建築・美術・工芸・音楽・料理を含む茶会という総合芸術へ発展させた

2017年3月26日

cha.sakai.ed.jp/learn/sogo.html
より

今、世界から注目されている日本の茶道！

日本を代表する伝統文化といえば茶道。

名著『茶の本』のなかで、岡倉天心は「いやしくも日本文化を研究せんとする者は、『茶の湯』の存在を無視することはできない」と言っていますが、まさしくその通りでしょう。というのは、日本文化の真髄、それはもちろん「万葉集」などの文学作品や数々の美術作品や遺跡のなかにしっかりと現れていることは言うまでもありませんが、日本人の日常の生活文化にかかわる意味での日本文化の真髄は、「茶の湯」、とりわけ千利休以後の「侘び茶」と言われる「茶の湯」のなかにたっぷり詰まっていると見てよいからです。

利休の「利休」という居士号は、「利を休む」、すなわち「利益」とか「功利」といった利(もうけ)とは無縁であることを意味します。



そもそも「茶の湯」というのは、私たち日本人が、日常生活のなかで、それこそ日常茶飯事である「お茶を点てて飲む」という行為を、一定の型にはめることによって「芸術」と言ってもよいほどに洗練させた美的生活スタイルです。このスタイルの最初の完成を見たのが、室町幕府8代将軍、足利義政に代表される武家や貴族による東山の殿中書院といった広間での「書院茶」です。それは、例えば牧谿や梁楷などの正統的唐絵とか曜変や油滴といった天目茶碗のような中国伝来の名物道具であるいわゆる「唐物」のもつ美しさ、すなわち端正で典雅で、一点の曇りもない完璧な美しさが重視される美の世界でした。この美の世界とまったく反対の立場に立つのが、簡単に言って「侘び」の美意識です。この美意識のもとでの「茶の湯」は、完璧な美の世界としての「書院茶」を否定して、例えば「待庵」のようなたった二畳の狭くて暗い草庵茶室とか備前焼や信楽焼、更には楽焼のような素朴で一見して粗末に見える和物陶器による茶器を使っておこなう「侘び茶」へと転換することのなるのですが、それを完成させたのが、千利休です。

「書院茶」から「侘び茶」への転換は、村田珠光や武野紹?によって準備されていたとはいえ、利休は、それまでの唐物は美しいが和物は美しくないという唐物至上主義的な武家・貴族文化の美意識に対して、素朴で庶民の生活文化に密着した和物雑器の「侘び」た味わいの美しさを評価し、それを積極的に茶道具に取り立てたのです。

すべての芸術ジャンルを総動員した一大「総合芸術」。

「茶の湯は、茶、花卉、絵画等を主題に仕組まれた即興劇である」と言ったのは岡倉天心です。

茶庭や茶室は舞台装置ですし、茶器、茶道具はまさしく大道具、小道具類です。利休は、それらを自らの「侘び」の美意識にしたがって駆使することによって、客との交わりの「一座」としての「茶会」を建立しようとする亭主、つまり言うならば「即興劇」の出演者であると同時に芸術監督、つまり「プレイング・アート・ディレクター」なのです。そのディレクター、利休にしても、うまく道具類を組み合わせると一回限りの「茶会」を成功させるのは並大抵のことではなかったと言われてい

す。しかも、この「茶会」という「即興劇」の上演に動員されているのは、茶庭や茶花といった「園芸」、茶室という「建築」から、絵画や墨跡の掛け物といった「美術」、釜や茶入や茶碗や水差や花入といった「工芸」をへて、本来「茶会」は清寂を楽しむものですが、茶釜にたぎる湯の音や「茶会」の後座の席入りの合図の銅鑼の音などの「音楽」的なものまで、芸術を構成する諸ジャンルのほぼすべてなのです。それに、普通は芸術のジャンルには入れませんが、ここに懐石料理としての「料理」が加わりますと、「茶会」とは、実に生活文化の領域までを含みながら、すべての芸術ジャンルを総動員した一大「総合芸術」であるということになります。



利休以後と三千家・各流派

利休以降は、茶道は武家社会にさらに広まりを見せ、大名茶人の古田織部やその弟子の小堀遠州を生み、彼らは、利休の精神をつぎながらも利休とはことなる風情の茶の湯に親しんだと言われています。

一方、千利休の系譜は、利休の孫である千宗旦(せんそうたん 1578~1658)が三人の子供たちに自分の茶を譲ろうと考え、そこから三千家が成立します。

代々の不審菴(ふしんあん)を三男宗左に継がせ、自分は末子の宗室と共に、同邸内に今日庵(あん)を建てて移り住みました。そして後に宗旦の二男宗守は京都武者小路に官休庵を建てました。

それぞれ表千家(三男宗左)、裏千家(末子宗室)、武者小路千家(二男宗守)と呼ばれ、いわゆる「三千家」を形づくっています。

その他、藪内流藪内家、遠州流小堀家、宗偏流山田家、江戸千家など多くの流派に分かれて発展し、今日に至っています。